



Title	中井竹山葬儀記録
Author(s)	山中, 浩之; 小堀, 一正
Citation	懷徳. 1985, 54, p. 84-112
Version Type	VoR
URL	<a href="https://hdl.handle.net/11094/90650">https://hdl.handle.net/11094/90650</a>
rights	
Note	

*The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

資料報告 中井竹山葬儀記録

山中浩之  
小堀一正

今年度は中井竹山葬儀記録の全容を御紹介できること

となった。この記録は昭和五十九年、新田和子氏（故中井終子氏養女）より、懷徳堂記念会に正式譲渡された懷徳堂関係資料のうち中井家歴代葬儀記録の中に含まれるものである。すでに加地伸行教授によって一部紹介がなされているように（本誌第五十二号）、これはまことに稀有な記録であり、葬儀そのものの具体的記述とともに、それに参列した人々の名が記されることで、懷徳堂の人間の社会的なつながりを考えて行く上でもきわめて貴重な記録である。この歴代葬儀記録の全体は次のような内容からなる。

(一) 中井鰥庵葬儀記録（宝暦八年六月十七日没、六十六歳）

(1) 焼香次第（もと表題なし）

二枚

(2) 葬列供役人名書付（同前）

二枚

(3) 葬儀行列

一紙

(4) 三虞朝夕奠品案

横帳一冊

(二) 中井鰥庵夫人葬儀記録（天明五年八月廿六日歿・七十四歳）

(1) 貞範媼裏事記（浄書）

横帳一冊

(2) 貞範媼裏事記（下書）

同一冊

(三) 中井蕉園葬儀記録（享和三年八月四日歿・三十七歳）

(1) 文明先生裏事録

同一冊

(四) 中井竹山葬儀記録（文化元年二月五日歿・七十五歳）

(1) 文恵先生裏事録

同一冊

(2) 御悔名簿

同一冊

(3) 香儀簿（もと表題なし・葬儀行列下書と合綴）

同一冊

(4) 竹山先生三虞朝夕奠

同一冊

(5) 中井履軒葬儀記録(文化十四年二月十五日歿・八十六歳)

(1) 文清先生裏事録

同一冊

(2) 香儀簿

同一冊

(3) 追念記(遺物分配記録)

同一冊

(4) 三虞朝夕奠品案

同一冊

(6) 中井桐園葬儀記録(天保五年五月廿一日歿・五十三歳)

(1) 専直先生裏事録

同一冊

(2) 到来控

同一冊

(3) 桐園先生葬式調物控

同一冊

(4) 桐園先生葬儀行列

同一冊

(7) 中井柚園夫人葬儀記録(文化十年十月五日歿・二十五歳)

歳

(1) 専直夫人貞柔裏事録

同一冊

(8) 中井碩果葬儀記録(天保十一年三月廿四日歿・七十歳)

(1) 文正先生裏事録

同一冊

(2) 三虞朝夕奠

同一冊

(9) 中井碩果夫人葬儀記録(安政六年七月八日歿・七十九歳)

(1) 御悔名簿(表題なし)

同一冊

(2) 三虞朝夕奠

同一冊

(6) 中井桐園夫人葬儀記録(明治元年七月廿五日歿・三十九歳)

(1) 良信室君裏事録

同一冊

(2) 三虞朝夕奠品案

同一冊

(3) 良信家君葬儀買物控

同一冊

以上、履軒夫人や桐園の記録を欠くが、ほぼ歴代にわたり揃っている。これらの記録は逐次紹介してゆきたいと考えるが、今回はそのうちでも最も代表的で詳細な内容をもつ中井竹山の記録を紹介することにしたい。ただし竹山関係四点のうち「三虞朝夕奠」(埋葬後、家に帰ってから、霊を安んずるために食物を供えて祭る儀礼)は、儒式葬礼において形式的な重要性をもつものではあるが、資料性と分量の点から割愛させていただく。

中井竹山はいうまでもなく懷徳堂第四代学主であり、十八世紀後半における学問教育界の主導者であったとともに、学者としてもきわめて精力的な著述活動を行なった人である。その伝は『懷徳堂考』や『中井竹山・中井履軒』に詳らかである。文化元年(一八〇四)二月五日歿、七十五歳であった。竹山の死因が何であったのかははっきりしないが、死の前年享和三年二月に「病中作」

と題する詩があり、「末疾支離、すでに浹辰(十二日間)、起居眼食、傍人を憐う」(『貧陰集』巻四)とみえ、手足が相当衰弱していたことがうかがわれ、さらに同年八月の長子蕉園の死は氣力をも衰えさせるものであった。心痛と衰弱が重なり、文化元年に入るや泄瀉・痰喘などを伴ない、二月五日息を引き取ったのである。竹山はじめ文桓先生と諡されたが、履軒の議によって文惠先生と改められ、誓願寺に葬られたのである。

その埋葬の方法や葬儀の実際については眼前に見るような具体性をもって裏事録に記される。儒葬であること、寺院関係は誓願寺一寺のみであることなど竹山が『草茅危言』(「送葬」の項)で記していたあり方と合致する。混雑を避けよといった点はかなり役割配備をもつて配慮されてはいるが必しも十分ではなかったようである。その際、升屋・尼崎屋・播磨屋など有力同志が葬儀を取りしきっている様が如実に知られるであろう。

「御悔名簿」には一九七名が記され、「香儀簿」にはのべ一七三名(重複をふくむ)がみられ、数多の会葬者・弔慰者の名前を知ることができる。それらの人名は懷徳堂につながる人々を確定してゆく上で重要な手がかりになるものと思われる。葬儀に携わって立ち働く一人一人の位置と役割からかれらの相貌を想像することもできようし、また会葬者の名前の背後にかれらの懷徳堂への関わり方をさぐってみることも興味深い作業となるように思われる。その意味でこの記録は竹山の死についての記録であるとともに、懷徳堂に関わって生きていた人々の記録でもある。

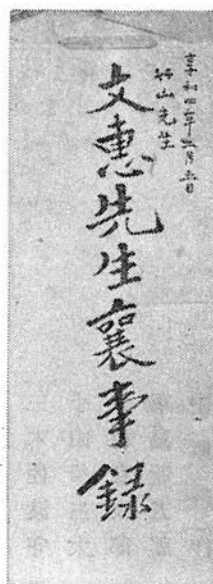
この記録は葬儀当日直後に作成されたもののようで、みられる人々も大阪およびその近辺の人々にほぼ限られているようであるが、たとえば頼春水のように「隔境之義、官禁も有之、執紼(柩をもつこと)会葬することを得ず、年来之交宜において遺憾至極奉存候」(『文奎余光』所収)というような人もおり、種々の理由で参列しえなかった人々も多かったものと推察される。

かつて、今はなき柿衛文庫主岡田利兵衛氏を伊丹に訪問したとき、氏は大正のころ、中井家の末裔中井木菟麻呂氏の訪問をうけたことを話された。木菟麻呂氏は、中井家歴代の葬儀記録を持参し、葬儀に参列した門下知友たちの子孫宅を訪ね歩かれていたのであった。岡田氏はその葬儀記録を実際にみ、氏の先祖(鹿島屋利兵衛)の名を確認したことを話された。このお話を聞いて以来、

その記録がまだどこかに現存しているとの思いを強くいだきつづけていた。それを今こうしてここに紹介できることをうれしく思う。と同時にこの記録が出現した以上、現在では甚だ困難になったとはいえ、木菟麻呂氏に

## 文惠先生裏事録

(表紙) 横帳一冊



享和甲子二月五日正午時終焉私諡曰文惠先生

護喪

古 林 温 秀

并 河 誠 輔

副 藤 田 九 郎 兵 衛

早 埜 義 三

山 片 平 右 衛 門

中井竹山葬儀記録

ならって御子孫宅を探し尋ねることも不可能ではなくなつた。そのためには多くの方々の御教示御協力が必要とする。この場をかりてお願い申し上げたいと思う。

司書

長谷川小右衛門

西 島 立 敬

中 川 元 吾

司貨

牧 熊 藏

同 新 三 郎

同 善 四 郎

訃告

行司

訃告案文

以手紙致啓上候、然者竹山先生御病氣御養生不相叶、今五日午時死去被致候、此段為御知申上度如此御座

候、已上

学校行司

二月五日

猶々御葬式来九日八ツ時之積ニ御座候、已上

右為相知候名当

京都之分

太田 碩庵  
并河 丹波介  
三木 佐渡守  
小山 伊三太  
大村 彦太郎  
革島 新五郎  
中原 敬作

右名前之分、太田碩庵氏方壱封口達相頼遣申候処、返書無之、一統心配之上七日晩方別飛脚藤兵衛さし登し申候事

伊丹之分

初終之日大塚千太郎被見廻申候ニ付、其地社中口達相頼候

尼崎	田中 純治
国分	柘植 中務
浜村	花崎 彦六
善根寺村	足達 重右衛門
北条村	古林 章甫
生駒	中井 周民
五条	横谷 東馬
龍野	中井 玄亮
河高	原 文四郎
家原	安達 勝右衛門
池田	荒木 善右衛門
住吉	小倉 周蔵
同	神奴 将監

其外遠方之分追而為相知申候事

公辺届向之事、岡橋丈助八田五郎左衛門氏方為聞合申候処、御隠居之義故御届ニ者及間布由申居候事

諸屋敷方切紙申達候事

町家懇意之方回状順達

同志親類分者御大切之砌、使者ニ而召集申候事

町内年寄川井氏へ即日口状ヲ以相達申候事

門鎖六日朝々十一日迄

両中井

古林

并河

自六日午至九日夕

治棺五日七ツ時申付ル

寸法

高サ三尺 横式尺

長サ貳尺三寸 厚サ壹寸六分

瀝青

外面六方内面四隅及ヒ底厚サ五分底之外面斗リ厚サ  
壹寸余瀝青惣目九十二斤

灰隔壹組内矩

松材厚サ壹寸高サ四尺方三尺五寸

帳場札幅四寸長壹尺三寸

休息所札幅六寸長壹尺五寸

墓標

筆者早野義三

中井竹山葬儀記録

竹山中井先生墓

アリサシ

(ここに素輿が入る)

扱地

早野義三  
久兵衛

貞淑様御碑之左傍素々設ケ被置候所

穿墳

寺ノ手伝へ申付ル

深サ壹丈六尺

扱地之上互ニ付置候事

石灰二石

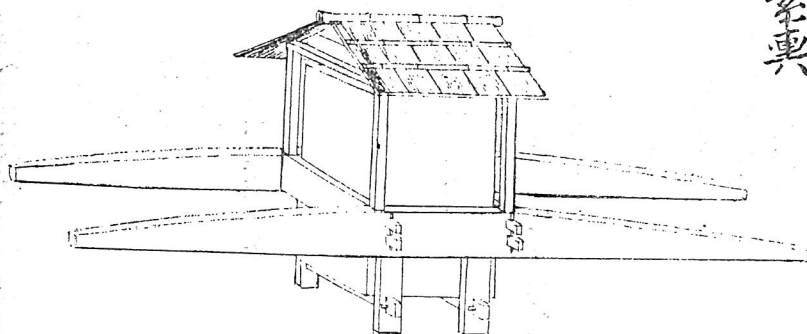
砂利二十荷山荷

細炭六俵

右石灰砂利者皆寺へ相頼候、細炭者堀江備前屋忠右  
衛門ニ而相求、以仲仕寺へ預申候

喪服 古林出入大和屋孫兵衛へ申付ル

素具



上下丹波布を用

一

服白縞ノ単衣

帯白縞

右三品孰茂裁チズテニ而斬衰ノ意ヲ存ス

右喪主七郎分

神主

木村平兵衛ニ申付ル  
執筆早野義三

沐浴襲歛之具

手盤 一

手巾 二

櫛 一

剃刀 一

剪刀 一

帯縄 一

沐浴

関平

佐兵衛

さや

さい

ふぢ



大歛

古林温秀

并河誠輔

田中純次

中川元吾

石野充藏

早野義三

関平

佐兵衛

棺中七星板之下石灰一斗

充囊 長短二百五十

棉褥 充以桐木屑

布紋 木線一段四裁用之

木棉一段別ニ兩裁シ四ツニ相疊ミ紋ノ裏ヘ十字ニ縫

付ケ布条トス

時服 熨斗目常紋付

下著 浅黄無垢

縞絆花色白巾

襪新製白加賀

深衣 萌黄選絲玄縁

帶 玄七子

轂

花色秩父  
鬱金加賀紐

拝領御紋付御著用之節御用有之故歛ニ加ル者也

儀刀二天工太右衛門ニ命ス

摺扇

握手用加賀絹

幌目 同

飯轆 同

涕紙 小菊一帖  
加賀絹右三品及ヒ襪ニ而凡一丈

沐櫛

臍帶

生時髮

剪爪

印章 文曰享和甲子七十五叟  
朱字又一顆曰積善白字

筆一対

研一面

墨一顆

紙二卷

煙草囊

煙管陶器

右五品病前創制ニ而一小箱ニ備具ス、直ニ是ヲ用ユ

右二品生前御好嗜候物故新趣意ニ而加之

棺蓋 文丸川茂延  
書早野正巳

易簀之前一日偶然被來候故、文之義相頼申候

文惠先生柩

先生諱積善字子慶姓中井氏稱善太号竹山一号同関子考  
甃菴夫子諱誠之妣植村氏拳二男先生其適也夫子之創府  
庠也万年春樓二先生相統教授先生受之異學時盛因有非  
徵之述天下靡然嚮正

東照大君開国之烈載籍不明故有逸史之撰捨虛取実名分  
以正

官嘉其績賜以章服其余著撰不止十数部為人曠度淵識英  
邁絶倫慈惠好与専以斯文為任修已有法教人有則精修勤  
勩老而益壯配革島氏生九男四女先先生歿告老自稱渚翁  
授庠務於第四子曾弘未数歳而歿第七子曾縮代受焉季女  
婦并河尚誠生二男一女而亡其余皆夭孫男二人女四人存  
者僅三女以享和四年甲子二月五日終去生享保十五年庚  
戌七十有五年葬誓願寺先塋之次私諡曰文惠

八日四時誓願寺吊ニ來ル

線香持參棺前一拝梵音兩三声尤低音ナリ

右之節寺僕ニ鳥目百文遣ス

銘旌

墓標ヲ用ヒ墓ノ字ヲ奉書ニ而包ミ柩ノ字ヲ書ス

築埋

旧例柩ヲ下スニ縛而已ヲ用ユ、此度之柩格別重キニ  
因リ穿墳之時ヨリ預メ杉丸太ヲ以墳上ニ架シ轎車ヲ  
繫キ湧泉ヲ汲出シ瘞埋ノ節者轎車ヲ脱シ俗ニ云万力  
ヲ繫キ執縛ノ力ヲ分ツ

巨繩ハ柩ニハ元來四縛有之所別ニ巨繩ヲ制シ柩ノ直中ヲ括  
ツナルヘ  
ナハルヘ  
新キヲ  
用ユ  
リ万力ヲ是ニ掛クル

万力ノ外巨繩二条ヲ墳上ノ木ニ掛ル、

墳中新制ノ棹ヲ下ス制ハ条例ニ審ナリ、棹ノ四傍石  
灰砂利ニ而堅ク築キ置キ、棹ノ内板ノ間隙咸ク子リ  
ニテ塗ル、底ニ數クニ細炭ヲ以ス、炭凡三俵炭ノ上  
石灰砂利棹外同様、

柩ヲ下ス節ハ杉丸太二本墳上ニ横タヘ、柩ハ素輿ノ  
俣其上ニ安置シ、大工太右衛門治兵衛兩人心ヲ揃ヘ  
静メト素輿ヲ解ク、四方ノ人ミ謹テ縛ヲ執ル、於是  
兩人ノ大工万力ノ繩ヲ執リ徐ニ是ヲ引ク、四方ノ人

モ共ニ縛ヲ挙ク、柩底上ル下二三寸乃チ丸太ヲ取  
ル、衆人一斉ニ力ヲ籠メ柩ヲ壙底ニ下ス、柩壙底ヲ  
去ル事一尺四方ノ位ヲ定ム事便ニシテ心配少ナク術  
簡ニシテ万事能片付タリ、往々并河氏ノ指図ニ出  
ヅ、後世法トスヘシ

棺ノ下傍四縛ヲ貫クノ環アリ、然ルニ棺外皆瀝青ア  
レハ環ノ根木ニ入ル事深カラス、且柩モ格別ニ重キ  
故四縛巨縄ニ皆棺底ヘ回ハシ環ヲ頼ミニセズ  
柩樽ノ間石灰ジャリヲ入レ海部丸太四本ニテ手ゴト  
ニツキコミ十分ニ堅カラシム、右石灰ジャリ何レモ  
水ヲ用ヒス其マ、ニテ用ユ、土地ノ湿リニテ自然ニ  
シマリ可申、モシ水ヲ用ヒ候ハ地中ニテ灰ノアクヌ  
ケ可申候由老年功者之手伝兼而聞候、此度其義ニ從  
ヒ申候

右海部丸太大工太右衛門申付前日ヨリ遣シ置  
柩上灰ジャリ厚サ一尺余、其上ニ細炭三俵ヲ施ス  
壙中ノ土地面ニ至ルマテ随分カタクツキコミ水氣ヲ  
含ミ不申様致候

九日午後早帳場之人数遣ス

但シ前例四ツ時可遣処、遅刻ニ相成リ会葬之人大分  
符合セ候様子ニ御座候事

帳場者誓願寺門前北之方溝之上ニ足なしの床几式脚  
わたし絵筵ヲ布申候

右絵筵即日持帰ルベキ処失念致候ニ付紛失ニ相成候  
事

布施 庄左衛門

手代

尼崎屋 七右衛門

手代

伊勢屋 藤四郎

手代

播磨屋 与市

手代

播磨屋 九郎兵衛

手代

福嶋屋 吉之助

手代

同家 僕 老人

右帳場一切福吉引請

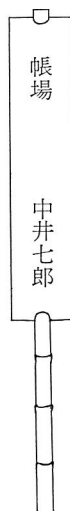
此内福嶋屋ノ  
式人手明キ

帳面五冊名札五ツ九日早朝福吉ヘ為持遣ス、帳場之

食事福吉々遣ス

右休息所一式舛平引請

又手代 宍人



行列

行列奉行

門内繰出し長谷川小右衛門

門外見繕 中井 要藏

同 田辺屋仁右衛門

筆者 中川 元吾

右札式枚共九日早朝寺へ為持遣ス

道筋

出門、東江せんだんの木橋筋、南江高麗橋筋、東江

難波橋、南江安堂寺町、東江上本町、南江

休息所 実相寺

応接者

舛平手代 式人

誓願寺

千草屋新三郎

麻上下半股立鞋履

侍 喜八

同

荒木敬治

同 角田才治郎

同 杉山庄兵衛

同 渡邊貫藏

先払

羽織一乃

治兵衛

塾生

同

佐藤雍藏

同 奥村弥二郎

墓標

柩

同 石野十藏

麻上下半股立鞋履

侍 伊右衛門

羽織一乃  
大工 太右衛門  
利兵衛

看板  
與夫 八人

與夫 八人  
早野 義三

麻上下刀  
草履取 関平

羽織一乃  
几杖持 半助

同  
草履取 関平

竹杖股立  
七郎

若党 清兵衛  
草履取 伝八

同  
抱手 幸助  
小市郎  
熨斗目麻上下股立草履  
雄右衛門

若党 正藏

草履取 藤兵衛

熨斗目十徳  
温秀

若党 庄兵衛

草履取 善助

帛紗麻上下一刀  
幸藏

若党 安兵衛

草履取 紙治ノ男

同  
誠輔

若党 弥助

草履取 藤八

帛紗十徳  
秀藏  
若党 喜兵衛

草履取 甚治郎

熨斗目麻上下  
左衛門志

若党 喜助

草履取 利助

革島新五郎名代  
帛紗麻上下  
三郎兵衛

草履取 紙治ノ男  
伝兵衛

草履取 清八

帛紗麻上下  
深造

若党 吉兵衛

草履取 太吉

熨斗目麻上下  
正平

若党 鎗持

此所にて行列  
少シ切アル  
三四間アケル

同  
志

帛紗麻上下一刀股立  
山中宗太郎  
帛紗麻上下一刀股立  
金崎市右衛門

同  
藤田九郎兵衛  
同  
金崎七右衛門

同  
加藤源助  
同  
山片平右衛門

草履取 挾箱持

同  
長谷川小右衛門

同  
塾生供  
利兵衛

同志供

笠籠  
尼市ノ男

丸川一郎

若党 鎗持

田中順治

同  
黒田弥太郎

同  
塾生供  
金兵衛

同志供

同

草履取 挾箱持

若党 鎗持

以上 空輿二

草履取 挾箱持

七郎 温秀

導師門前迄迎

香可被成候

焼香列

中井七郎

礼場寺内

中井雄右衛門

七郎

并河小一郎

雄右衛門

長島肇

小一郎

当日病氣不蒞  
幼少ニ付名代  
内ニ而焼香ス

草島新五郎

秀藏

并河誠輔

以上

古林温秀

留主人

篠田剛藏

長島正平

履軒先生

太田新藏

淡輪元潜

古林秀藏

岡橋丈輔

早野義藏

西島立敬

以上

但し同志塾生其外門下之輩、都而内ニ而焼香ス

玄關番

出棺前玄關へ張紙し寺ニ而之焼香相断候事

家内惣世話

門人中焼香寺ニ而者混雜可仕候間、此所ニ而御焼

岡田直藏  
田辺屋仁右衛門  
同 為五郎

下之分

はりまや

文 助  
佐 助

料理方

惣 八  
大 忠  
八百 弥

寺へ遣ス物

米七升

煮メ

香のもの

右之品九日午時平兵衛ニ為持遣ス、是ハ築埋之後親  
戚并ニ世話方人数斗リ相用可申備ニ御座候へ者築埋  
中ノ炊飯

寺ニ而世話方

山西 宗五郎  
上村 屋幸助

一紀国屋六左衛門神崎屋清助右兩人九日朝々参り寺之  
見繕墓所見分等相頼申候事

茶船壹艘

右上大和橋へ繋置埋築ニ与リ候親戚人数乗り帰ル

帰後夜食可出人数

親類同志別懇之内并遠方会葬之人

右同志中者遠方トモ枉テ一同被帰候様申候事

帳場之人

休息所応接之人

借り人

雇ヒ人

凡百五十人

料理献立

汁若和布

猪口 胡麻味噌あへ  
蓮根独活こんにやく

右式種古林々来ル

ひりやうす

平くわへ  
さゝがき牛旁

右并河々来ル

坪 酒麩生姜

香のもの

右内ニ而拵ル

但し坪者上分五十人分斗リ下之分斗酒を献さし  
出ス、是者到来之酒ニテ相済

二月十日  
誓願寺御納所

外ニ貳百文垣外番人へ

十日寺へ施物遣ス

目録

一金貳百疋	御導師様	老封
一銀三匁	御役僧様	四封
一銀貳匁	御小僧様	老封
一銀三匁	御同宿様	同
一銀貳匁	墓御経料	同
一銀三匁	挾箱料	同
一銀貳匁	几杖料	同
一南鐙沓片	御台所茶料	同
一銀三匁	実相寺御茶料	同
一南鐙沓片	七々日忌志	同
一齋米七升	同七々忌志	
一鳥目五百文	盛物料	
一同 貳百文	御家来へ	
一同 貳百文	雇老婆兩人へ	
右之通り御受納可被下候		

中井七郎

寺ニ而払申候分

一四貫文

穿擴人足

定格三貫文ニ而相済申候處、此度者場所手広ク人足格別  
余計ニ相掛候ニ付老貫文増遣ス事

一老貫五十五文

寺手伝清五郎

但シ

一百十貳文

床三枚かり賃

一百九十文

丸太九本かり賃

一五十五文

縄

一百十四文

綱貳本

一五百九十文

日雇貳人事  
但シ掃除小遣等ニ使ウ

一百六十八文

八百安

但シ

一百四文

いかき貳ツ

一六十四文

いとつな貳ツ

一老貫三百五十貳文

土長



但シ砂利二十荷代

一 卷貫四百四十八文

但シ

一九百四十八文

墓所跡片付  
手伝四人

一 三百文

寺之男貳人

一 貳百文

手桶壹つ

一 三十六匁

灰屋喜兵衛

但シ石灰貳石代

一 六十文

京屋新兵衛

但シ花竹代

一 卷貫三百六十四文

舟屋善兵衛

但シ六百八十文九日歸りの船

又六百八十文十一日家内寺参之船

一 十五匁

吉野屋政七

但シレンジャク毛棉貳反代

一 四十貳匁壹分

美濃屋左兵衛

但シ先払一人 卷入前四匁三分ツ、

先供侍貳人 同

若党貳人 同

中井竹山葬儀記録

宰領

明手貳人

同

雇 六人

六日、九日迄  
卷日三匁ツム

一 七貫貳百三十貳文

但シ與夫十六人 卷入前三百文ツム

供駕五人

同

一 九百三十貳文

但シ貳十八人髮結代

一 卷貫文

右與夫十六人へ酒手ニ遣ス

一 南鐙壹片

左兵衛心付

一 銀三匁

藤兵衛心付

一 貳十七匁五分

福島屋吉兵衛

但シ牛黄半兩代

一 三十八匁

大和屋孫兵衛

但シ

一 拾匁貳分

白綿布壹反代

一 貳匁

同帶五尺代

一 壹匁五分

喪服仕立代

一 八匁三分

丹波布壹反

一 貳匁九分

同足し切レ

一 貳匁五分

上下仕立代

一 四匁貳分五リ

白加賀五尺

一五匁五分 同五尺

右式口者眼目仮轆握手轆鼻棍之用

一八分五リ 白縞布式尺

右喪主雁来痘ニ付臨時申付候脚絆切レ

一貳百十八匁貳分

大工多右衛門

但富平材木代

一五十九匁四分

同人作料

但シ一四十六匁五分

手間十五人

一十貳匁九分

夜仕事手間三人

一南鐙卷片

多右衛門へ心付

一同 卷片

利右衛門へ心付

一十五匁五分八リ

釘代

一十八匁貳分

細炭六俵

但し卷俵ニ付貳匁八分替

卷匁四分駄賃

一貳貫四百三十六匁

かしふとん代

一三十匁匁卷分

袴仁

但シ毛棉六反代、反ニ付五匁貳分替

一三百文

桐鋸屑卷石

一一百貳十四文

穀皮代卷石

一六匁五分

さし物屋平兵衛

但し神主代

一貳匁八分

右神主靈筵

一七匁三分五リ

右充囊之用

一百七十五文

右七星板下之物

一四十八文

陶烟管

但し八文不足

一七十文

桶

右沐浴之用

一十六匁五分

細引四百五十匁

右縛之用

一四百文

京都飛脚小遣

一百文

誓願寺男

右御吊悔之常供

一貳百文

泥鑊かり代

右者瀝青之時分入用

一五十匁八分七リ

近江屋弥兵衛

右者瀝青十四貫八百匁斤ニ付五分五リ替

一貳百文

帳場へ遣ス小遣

一三十七文

元結代

右者股立之用

一貳百文 片挾箱かり賃

一三匁 会所周助

一貳百文 下役式人

一貳百文 町垣外番

一貳百文 町髪結

一 草履八足料

但し草履五十足草鞋百疋到来之不足

一四匁 墓参包銀貳ツ

右者十一日家内墓所拝礼之用

## 条例

一沐浴 瀝青

穿壙

右三事総テ文明先生ノ例ニ從フ、少々之異同ハ別

ニ審ナリ

一素輿

文明君之例ニ從フ、少々不宜所更ニ新製ヲ用ユ、

寸方製度前図ニ審ナリ、切ニ新製ヲ用ヒ旧製ニ從

フマシキ事

一充囊

初メ桐木屑一石篩ニカケ炮烙ニテ乾シ紙囊百五十ニ充テ用之、柩格別ニ大キムニヘ大ニ不足、大斂夜ニイリ候ユヘ桐木屑難調、翌穀皮ヲ一斛ヲ求メ紙囊百五十ニテ充之少々余候

一八日素輿出来上リ候得ハ柩ヲ西來ニ安ス、是ハ火事ノ備ナリ、奠物焼香等皆文明君ノ例ニ任ス

一墓所入口竹垣之事

旧例無之、但シ築埋之節会葬之人多く入来リ難渋ニ付、此度本堂之横手ニ垣ヲ設ケ親類之外一人モ入不申候、入口ニ者山片平右衛門殿人ヲ塞キ被申候、同志之者も不入来候、後に者塾生四人此所ヲ守ル、依之テ築埋心靜ニ相調ヒ万事行届キ甚宜候、永例ト成ヘシ

一大斂之事

楼上ニテ易簀ニ付、沐浴後柩ヲ二階切落シ之木口ニ安置ス、上ハ万力ニテツリ、下ハ丈夫ニカイ物ヲ置キ、少シモ動カニ様ニ縛ヲ以テ四方ニユイツケ蒲団ノマヽ柩之キハニ安シ、柩之上ニ板ヲ設ケ布紋ノ四端及布条ノ四端ヲ手々ニ取り尸ヲ板上ニ置キ板ヲユキ徐ニ斂ム、充囊ニテ半ハツメ飯ニ蓋ヲ置キ扱万力ヲ掛ケ縛ヲ取り徐ニ下ス、甚ヨシ、

以テ永例トスヘシ

モシ楼上易簀ニアラズトモ床ヲ切テ柩ヲ下シ歛

スベシ

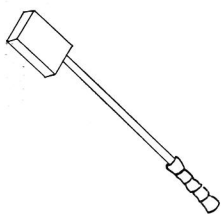
一 瀝青之事

中橋筋淡路町北へ入ル西側近江屋孫兵衛ニ申付ル

鍋竈共ニ持参

瀝青かけ候者不案内故大工ニ命ス

こつての図



右こて鍛冶屋ニて借り火ニ焼キ瀝星<sup>(ハシ)</sup>かけ候上くる

いを直し候

一 神主之事

旧例墓所へ持参候所、履軒先生御説ニ古礼右之義  
無之旨被仰聞候ニ付相止メ、虞祭迄包ミ置虞祭之  
節始而取出し靈座を設候、可以為永則

遺書四通御死去之前寛政庚申之歲御  
病中ニ出来候分

一通 履軒先生

一通 側婦

一通 遠蔵七郎

一通 同志中

右同志名宛左之通御認有之候

金崎 七右衛門

金崎 市右衛門

藤田 九郎兵衛

山片 平右衛門

池上 吉兵衛

永井 藤四郎

加藤 原助

黒田 弥太郎

長谷川 七郎右衛門

藤田 忠右衛門

古林 温秀

并河 誠輔

山 中 和 二 郎格別之仔細有之間  
別翰ニ而右連名状之後ニ  
繫キ有之候

右遺書中趣意ヲ以送葬之節同志中行列ニ加へ申候

但シ金崎七右衛門事先達御死去、當時七右衛門弱年

ニ付列位指替へ申候

和二郎事も先達御死去、當時惣太郎へ家督相続故遺

書行列名前相違有之候

池上吉兵衛永井藤四郎当病ニ付不臨候、藤田忠右衛

門先年死去被致候

# 竹山先生御悔名簿

(表紙) 横帳一冊



荒木 敬治  
池内 八兵衛  
淡路屋 弥太郎  
平野屋 政次郎  
平野屋 松三郎  
菱屋 多兵衛  
山 西宗五郎  
藤屋五郎左衛門  
。 麻田 立達  
日笠 喜代治  
明石屋 庄二郎  
小松 五左衛門

浅野屋 与兵衛  
ますや 貴太郎  
篠崎 長左衛門  
吹田屋 彦三郎  
かしまや 伊介  
落合 鷹之介  
三宅 幸藏  
寓佐美 治兵衛  
团扇堂 惣兵衛  
鴻池 与兵衛  
豊田 孫左衛門  
七里 鎌倉兵衛代  
牛尾 養 葦  
。 千草屋 久左衛門  
真島 隆 徳  
米屋 助右衛門  
小西 新 介  
大西 新次郎

岡田 織悦  
田 中 方 葦  
千草や千兵衛  
同 平 蔵  
同 朝 蔵  
小泉多美衛  
岩 田 元 卓  
泉屋次郎右衛門  
鴻池伝兵衛  
高島屋喜兵衛  
岡田屋治兵衛  
加賀や作右衛門  
村 瀬 亀 蔵  
菅野尚太郎  
菅野順三郎  
。山城屋利兵衛  
升屋喜右衛門  
古 山 厚 斎  
生田 忠左衛門  
同 森之介  
清水弥太郎

泉屋理兵衛  
同 権右衛門  
金子市右衛門  
金子源二郎  
千草屋宗十郎  
花 崎 彦 六  
広屋徳右衛門  
川 井 立 牧代  
岡 田 矢 柄  
小川屋喜太郎  
越ぼせや万兵衛  
河内屋吉左衛門  
。千艸屋義輔  
加賀屋喜助  
松 井 和 泉代  
会 所 周 助  
鈴 木 寿 伯  
谷 口 莊 次郎  
平野や伊右衛門  
八 尾 与 作  
朝比奈茂右衛門代

國元ニ罷下候ニ付  
乍略儀以使御悔申  
上候

無抛用事有之候ニ  
付送拜ニハ忤ラ差  
出シ可申候

川出源左衛門

同辰藏

江邑大助

天王寺や伊右衛門

加賀屋治左衛門

鴻池栄三郎

瓦町二丁目

漆屋六兵衛

伊丹

茜屋四郎右衛門

布施庄左衛門

布施虎之介

伊丹

山本鹿藏

木村原藏

同直次郎

同吉右衛門

丸岡古元

森川曹吾

山田宗湖

荒木伝治

。千草屋善太郎

近藤一学

中西司馬太郎

同五郎右衛門

。升屋平次郎

同七郎兵衛

助松屋新二郎

。林專齊

保田玄脩

川上十郎左衛門

酒井健斎

同礪吉

近藤三右衛門代

日野や重五郎

左官市左衛門

屋根屋藤兵衛

鴻池善右衛門代

田嶋や安兵衛

奥野鴻二

小川屋原介

吹子や友三郎

伊勢や万兵衛

金谷与右衛門

小山田玄熊

浪花屋徳兵衛

傘屋半兵衛

伊丹 鹿島屋利兵衛

同 大塚千太郎

同 岩田忠右衛門

同 瓦屋茂兵衛

同 大和田屋善兵衛

同 木綿屋喜八郎

同 伝法屋忠兵衛

同 樽屋吉右衛門

同 丹波屋孫右衛門

同 玉屋平八郎

藻井泰藏

細井金藏

袴屋千助

小川屋義兵衛

鴻池善五郎代

河内屋三右衛門

鴻池伊兵衛

竹屋甚右衛門

田中や喜右衛門

紀伊国や政富

丸屋吉右衛門

佐伯和吉

二高清兵衛

。千草屋新三郎

。鳥橋小吾

鴻池善作

瀬田藤四郎

同 犀太

足立十右衛門

伊勢屋藤助

十時半藏

村瀬亀藏

富田屋平右衛門

雜喉屋三郎右衛門

。茅原元常

鴻池善之助代

鴻池市兵衛代

住友吉次郎代

天王寺屋清八

近江屋五郎兵衛

役用ニ付御送葬  
得不仕候



井筒屋平次郎  
安田屋甚兵衛  
加島屋要助  
窪田曹卿  
窪田専立  
姫路屋吉郎兵衛  
粉川屋元三郎  
八田五郎左衛門  
桑原権九郎  
和泉屋太兵衛  
大島千駒  
河内屋勘四郎  
吉住富太郎  
河内屋清七  
鹿島屋惟助  
絆屋泉次郎  
服部半兵衛  
田中周安  
油屋徳三郎  
渡辺新蔵  
三木佐渡守

役用ニ付以名代  
御悔申上候  
同断  
伊丹  
得貴願御悔可申上  
候得共御紛致中申  
上置候

昨日之御葬御見送可申告ニ  
候得共當番ニ付不能其候今  
日八午延引御悔参上仕候

病氣ニ付下延引  
御悔申上候

此間上京仕下  
延引御悔申上候

辻次郎右衛門  
浅井和之丞  
田中良民  
伊豆蔵伝蔵  
藤井寿八郎  
大西駒蔵  
賛牧太  
工藤七郎右衛門  
荻野勘左衛門  
関根庄蔵  
川井立牧  
野原半左衛門  
小野和一郎  
山下吉太夫  
西田左内  
陶山与兵衛  
足立十右衛門  
井筒や平次郎  
瀬田藤四郎  
同犀太



金百疋  
八匁六分  
南鐐一片  
南鐐一片  
南鐐一片  
四匁三分  
金百疋  
金百疋  
生花  
湯葉  
狗脊  
酒券  
南鐐三片  
銀三匁  
芋一器  
四匁三分  
南鐐一片  
煮染  
めし  
金百疋  
南鐐一片  
南鐐一片

八尾 与作  
谷口 莊二郎  
川出 源左衛門  
岡橋 丈輔  
渡辺 鹿藏  
升屋 惣兵衛  
山口 平右衛門  
山片 平次郎  
古林 秀藏  
長島 肇  
長島 正平  
加賀 やます  
布施 莊左衛門  
布施 虎之助  
神崎 や清助  
播磨 や兵助  
谷川 達菴  
永井 藤四郎  
大和 や喜兵衛  
樽や 吉右衛門  
南鐐二片  
南鐐一片  
南鐐一片  
南鐐一片  
南鐐一片  
南鐐一片  
南鐐一片  
南鐐一片  
金百疋  
白檀  
四匁三分  
金二百疋  
銀三匁  
酒二升  
南鐐一片  
金二百疋  
金百疋  
南鐐一片  
金百疋  
線香  
白檀

森田 忠兵衛  
岩田 忠右衛門  
大塚 千太郎  
木棉 や喜八郎  
谷 平八  
岡田 利兵衛  
池上 茂兵衛  
豊田 孫右衛門  
同 芳藏  
和田 丈斎  
滝 伴次  
大村 彦太郎  
吉見 勇三郎  
岡田 や治兵衛  
佐伯 和吉  
田中 純二  
井河 左衛門志  
渡辺 貫藏  
太田 深造  
三木 佐渡守  
柘 中務

金二百疋  
四匁三分  
銀三匁  
金三百疋  
四匁三分  
銀貳匁  
南鐐十片  
四匁三分  
南鐐一片  
南鐐三片  
銀三匁  
野菜  
乾物  
野菜  
あつき餅  
野菜  
巻湯葉  
角湯葉  
道喜粽  
饅頭

金崎市右衛門  
中川卓次郎  
竹島正三郎  
金崎七右衛門  
村津礼吉  
梁田八百吉  
池上新助  
藤井莊右衛門  
淡路や弥太郎  
石野充蔵  
角田才二郎  
佐藤要蔵  
姫路や吉郎兵衛  
服部半兵衛  
菅野尚太郎  
菅野順三郎  
川北陽三郎  
白木修蔵  
助松や新十郎  
蛇草内膳  
加賀や作右衛門  
鈴木治兵衛

金百疋  
金百疋  
銀三匁二分  
饅頭切手  
四匁三分  
野菜  
金三百疋  
小倉野二十  
四匁三分  
羊肝券  
野菜  
南鐐一片  
酒券二枚  
白雪糕  
麩餅  
滋飴一桶  
酒一樽  
尾張茶  
銀四匁三分  
柳川茶  
里いも  
金二百疋

小山猪三太  
松井和泉  
梁田八郎右衛門  
加藤原輔  
金崎七右衛門  
平瀬久左衛門  
富子助右衛門  
朝日右文  
吉見勇三郎  
荒木伝二  
山本彦三郎  
千種や平蔵  
千種朝蔵  
真島隆徳  
中井雄右衛門  
河内や六兵衛  
中西司馬太郎  
永井藤四郎  
奥田少助

金百疋  
南鐐一片  
椎茸  
野菜  
松茸  
頭芋  
羊肝券  
八匁六分  
湯葉  
南鐐一片  
酒券  
銀三匁  
饅頭券  
羊羹  
嵯峨饅頭  
椎茸  
御所柿  
四匁三分  
銀式匁五分  
同式匁  
茶二袋  
滋飴一桶  
柿廿枚

日野や重五郎  
岡寅齋  
山中善右衛門  
大村彦太郎  
上田貞齋  
島榮太郎  
井阪次郎右衛門  
村井友三郎  
赤松文平  
井川応輔  
鈴木寿旧  
上村屋幸八  
山西宗五郎  
岩崎徳左衛門  
中井藍江  
藤江貞蔵  
俣野嘉膳  
中井玄亮  
工藤四郎次郎  
工藤右源太  
松茸  
同  
同  
南鐐一片  
羊羹  
湯葉  
線香  
四匁三分  
松茸  
金二百疋  
四匁三分  
氷豆腐  
千年餅  
野菜  
かやく湯葉  
四匁三分  
赤小豆  
茶巾餅  
金百疋  
饅頭券

田辺与兵衛  
西村仁右衛門  
米屋孫八  
升屋与市  
佐松市太郎  
長島正平  
神奴千枝  
窪田専立  
山本増左衛門  
原戸清介  
牧熊蔵  
賛牧太  
清水弥三郎  
早野義三  
藤田九郎兵衛  
稲垣政之祐  
奥野鴻二  
古林温秀  
藤村源右衛門  
藤村喜三郎  
田坂安二郎

同

羊羹  
饅頭券  
茶一袋  
虎屋落雁  
金百疋  
鹿呉茶  
酒一樽  
銀耆奴五分  
松茸  
南鐮一片  
酒一陶  
生姜糖  
四奴三分

金十八両耆歩式朱  
銀百十四奴九分

大和や金兵衛  
滋岡亀蔵  
一向僧可淨  
小泉多美衛  
岡田織悦  
七里鎌倉兵衛  
岡田彦兵衛  
岡田卯左衛門  
鴻池伝兵衛  
藤田与市  
小西新助  
柳生長兵衛  
中務  
池上新助  
金山重左衛門

〈懷徳堂関係研究文献提要(三)〉

一一一

(7) 論文・竹安繁治「大阪町人思想史の一齣——学問意識と身分意識——」(『ヒストリア』第15号・昭和三十九年)

本論文は、近世大阪における町人思想の一面を、懷徳堂を中心として考察しようとしたものである。その視点は、①近世庶民階級における学問意識の発達は、封建的身分意識に対する学問意識の対抗、ひいては後者による前者超克の過程に認められる、②それは具体的には庶民学者における専業・兼業の問題として顕現している、③これらの事柄は、経済的発達という現実的基盤を前提としている、の三点である。

第一の点について、筆者はまず懷徳堂の定約からその学問観を検討し、特に壁書第六条から、庶民の学問の在り方として考えられている四つの型を導き出す。即ち、第一は一般庶民の学問、第二は、一定の生業が学問以外に予想される同志としての学問、第三は学問を専業として世に処する者の学問、第四は庶民学の否定態としての学問である。言うまでもなく、あるべき庶民学者の態様としては前の三つの型が望まれるが、まさにそのことこそ身分意識に対する学問意識の優越を意味する、と筆者は指摘する。なぜなら、第一から第二、更に第三の型へ、というのが一般に学問意識展開の過程であり、かつ第二(兼業)から第三(専業)への転廻は、農工商などの原身分から専門学者へという、実質的な身分的変改への期待を含んでいるからで